

戸坂潤と社会学批判
—— 〈社会的なもの〉 / 〈政治的なもの〉 ——
寺前 晏治（立命館大学大学院）

近年の社会科学において、〈社会的なもの〉への関心が高まっている。「社会の発見」論を嚆矢として、明治・大正期の「社会」概念がどのような意図のもとで用いられたか、という問いの立て方がなされるようになった。そのような動きは、まさしく『社会喪失の時代』の産物といえよう。

そのような状況にあって、「社会」を対象とする学問たる社会学が〈社会的なもの〉、あるいはそのなかに埋め込まれた〈政治的なもの〉をどのように捉えてきたのかを問う必要がある。本報告の目的は、戸坂潤らの「社会学研究会」が痛烈に批判した社会学の「実践性の欠如」の内実を明らかにすることである。

1933年に創設された「唯物論研究会」の前身となる「社会学研究会」が1931年に結成された。ここでは文化社会学が議論の中心になった。それと同時に、マルクス主義の側から社会学に対して実践性の欠如を理由に痛烈な批判が向けられることとなった。

他方、この時期にはマルクス主義と社会学の双方が文化社会学を受容することで、共通の議論の基盤が強固に形成されたとみることができる。しかしながら、結果からいえば、ここではマルクス主義と文化社会学が「奇妙な癒着」をみせ、マルクス主義の側からの日本の社会学に対する一方的な批判に終始した、とされる（秋元 1968）。

社会学の近傍に立ちながらもマルクス主義の立場を採り、なおかつ文化社会学的であるということは、「社会学研究会」という組織形成の実践を抜きにして論じることにはできない。既存のアカデミズムの外での、すなわち、大学とディシプリンを越えた組織の形成が「社会学研究会」を通じてなされたにとらえることにより、社会学批判におけるある実践のあり方をみることは可能である。これは「社会学研究会」を一つ運動して把握することである。戸坂潤（1932）によるとその運動は、「資本主義の精神」との対決のうちにこそ、その意義をもつとされている。

ここから、既存の社会学からは「逸脱」しながらもマルクス主義と社会学との交錯する地点に立つ、「社会学研究会」の特異な位置取りが明らかとなる。「社会学研究会」においては、日本における既存の文化社会学ひいては、制度化された社会学に対して、その理論的・実践的な批判と制度外での組織形成という方法によって再考を迫ることにより、「真の文化社会学」を開始し、そこから資本主義体制の打倒を目論んでいたことが明らかとなる。「連帯と平等」を志向する〈社会的なもの〉は、資本主義体制の打倒という直接的な形で提出され、その方途として「真の文化社会学」がなされなければならなかったのである。

「真の文化社会学」による文化社会学とマルクス主義の「止揚」の背景には、「市民社会」の克服と創出がここでは重ね合わされている。それを可能とする領域が「文化」なのであった。